建林正喜先生をお送りする言葉

経済学部長　関　弥三郎

建林正喜先生は昭和四十九年三月三十一日付をもって立命館大学を定年退職されることになりました。建林先生を本学部にお迎えして以来早や十ヵ年が経過したのですが、その間に先生が経済学部に残された功績は多大なものがあります。

建林先生は山口県の御出身でありまして、昭和七年神戸商業大学（現在の神戸大学）を御卒業後（戦時中の中断を除いては）一貫して教職におられ、昭和高商、彦根高商等を経て広島大学に永く勤務していられたのを、昭和三十九年四月本学部にお迎えしたのであります。その時今は亡き手嶋正毅先生と御一緒であり、年長者の手薄な経済学部にとって有力な教授を二人も得られたことを喜んだのですが、その反面教授を二人も同時に引き抜かれた広島大学に対してはまことに申し訳ない思いをしたものでした。

建林先生は本学部では経済原論Ⅱ（近代経済学）、経済変動論、一般教育の経済学を担当され、深い学識と豊富な教育経験、更に先生の温厚なお人柄によって多くの学生の人望を集めて来られました。先生は近代経済学とマルクス経済学の双方に精通され、その点では数少い経済学者の一人として学界で活躍しておられるのですが、方法論的に全く異質の二つの経済学について一応の知識をもつことを要求される今日の学生にとって、建林先生のようなお方は貴重な存在であるといえましょう。

建林先生は昭和四十一、四十二年度の二ヵ年間にわたって経済学部長の重責を果され、続いて四十三、四十四年度には図書館長に就任されました。特に四十四年始めに学園紛争の嵐が吹き荒れた際には、先生は御年配にもかかわらず若い教職員と労苦を共にしてその正常化に努力されました。その後は就職委員として学生の就職開拓、斡旋に尽力される等、学校行政の上でも多くの功績を残されたのであります。

建林先生は早くから父上を失われ、五人きょうだいの長男として母上を助けて生活の苦労を味わわれたとのことですが、それが先生の温厚で包容力のあるお人柄に結実しているものと推察されます。かつて先生は新入生に与える言葉として「きびしさを持て。苦しみながら悩みながら勉強していただきたい。その根性が君たちを育てるのだ。」と書いておられますが、このお言葉は先生の研究生活を貫く信念でもあり、また経済学部の教員にとってもこよなき先生の御教示として銘記すべきであると思います。

建林先生は御就任以来本学部の充実、発展に大きく貢献して来られました。定年とはいえ先生を失うことは経済学部にとって大きな痛手であり、惜別の情耐え難いものがあります。このような気持ちが建林先生に特任教授として今後三年間本学部にとどまっていただき引き続き御教授を賜りたいという願いとなり、それが聞き届けられましたことは、私達にとって大きな喜びであります。

建林先生、永い間経済学部のために御尽力くださいましてありがとうございました。御退職後は御健康で余生を楽しくお過しくださいますよう、経済学部関係者一同心からお祈り申し上げます。と同時に今後共私達経済学部の後輩に御指導を賜りますようお願い申し上げまして、先生をお送りする言葉を終ります。

一九七三年十月